

聖書：ヤコブ 3：13～18

説教題：知恵のある賢い人

日時：2017年10月22日（朝拝）

「あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか」とヤコブは問うています。彼はこの手紙を迫害によって散らされたユダヤ人クリスチャンたちに書きました。彼らは散らされた場所でサバイバルゲームのような毎日を送っていました。そんな彼らの中には、3章1節で見ましたように、教師になりたいと思う人たちも多くいたようです。今いる共同体の中で皆から認められる地位に着きたいと。しかしヤコブは人間的な思いで教師を志すことに対して警告の言葉を語りました。彼らは自分こそ賢い、自分こそ他の者より知恵があり、人を教え導くことのできる者である。そういう自負心を持っていたようです。そして同じ考えを持つ他の人々と争い合う傾向があったようです。そんな彼らに対してヤコブは13節で「あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか」と問います。きっと読者の中には心の中で「はい、それは私です！」と思う人たちが多くいたのでしょう。そんな読者たちにヤコブは、真に知恵のある賢い人とはどういう人なのかを語って行きます。

まず彼は「その人は、良い生き方によってそのことを示しなさい」と言います。これは行いを強調するこれまでのヤコブ書のメッセージと同じです。知恵のある賢い人は自分がどれだけ沢山の知識を持っているかをひけらかすことによってそのことを示せるのではない。どれだけ理路整然と神学を論じられるかでそのことを示せるのではない。頭で知っているだけなら悪霊だってそうだ！とは、前の2章19節で語られたことです。ヤコブは2章22節で「信仰は行いとともに働く」と言いました。それと同じように、自分は知恵のある賢い人間だと自負する者は、そのことを良い生き方によって示さなければならない。ここの「良い」という言葉は「美しい」とか「魅力的な」というニュアンスを持つ言葉です。すなわち美しい生き方、人々が見て素晴らしいと思う振る舞いにおいてということです。もしそのような生き方、生活に現れて来ないなら、それは本物の知恵また賢さとは言えない。

またヤコブは「その知恵にふさわしい柔和な行いを」と言います。ここに真の知恵を持つ人は「柔和」という特性を示す人でなければならないと言われていました。「柔和」

は「へりくだり」とか、「謙遜」というニュアンスを持つ言葉です。これこそ今日の箇所におけるヤコブの基調メッセージと言えます。1章5節で「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい」と言われていましたように、真の知恵は神から来ます。また箴言に「主を恐れることは知識の初めである」とあります。ですから真の知恵・真の知識を持つ人は、神を知り、また自分を知るがゆえの心の低さ、謙遜、神への感謝、そしてそこから生まれる優しさを持っている人です。自分を誇ったり、他の人と争うような人ではありません。当時のギリシャ世界では、柔和あるいは謙遜は美德とは考えられていませんでした。それは弱い人、劣る人のしるしであり、戦いに敗れた人の姿と位置付けられていました。しかしキリスト教においては違います。イエス様は山上の説教で「柔和な者（へりくだった者）が幸いです」と言われました。またマタイの福音書11章で「わたしは心優しく、へりくだっているから、・・・わたしから学びなさい」と言われました。真の知恵を持つ人には、必ず柔和さが見られるはずです。

従って14節に描かれている人は知恵のある人とは言えません。そこに「しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば」と言われています。これは読者たちの間にしばしば見られた姿だったのでしょう。「ねたみ」とは熱心という意味を持つ言葉です。熱心には良い熱心もありますが悪い熱心もあります。ここで言われている人々は、誰かと自分を比較して、その人と争い、その人に打ち勝つことに熱心になっている人たちのことです。また「敵対心」という言葉は「党派心」という意味を持つ言葉です。相手と対抗するために自分のグループを作る。そして自己主張し、自分を高く持ち上げ、相手と張り合っ、競り勝とうとする。「このような心があるならば、誇ってはいけません」とヤコブは言います。なぜならそれは本物の知恵ではないからです。誇るに値しないことだからです。それは真理に逆らって偽ることだと言われています。自分は賢くないのに、賢い者であるかのように振る舞っているからです。

こう述べてヤコブは続く15～17節で、二つの知恵を対比的に述べています。その二つとは、上から来る知恵とそうではない知恵です。まず上から来たのではない知恵についてです。14節で見た、心の中に苦いねたみや敵対心が宿っているような知恵は上から来たものではありませんとヤコブは言います。すなわち神からのものではない。ではその知恵はどこからのものなのか。15節に三つのことが述べられています。一つ目は「地

に属し」。これは地上的ということです。この世的ということです。天から出たものではなく、この世限りの、やがては消え去り滅ぼされるものである。二つ目は「肉に属し」。欄外の15を見ると「あるいは『靈的ではなく』」と記されています。つまり聖霊によるものではない。神に属するもの、神から来るものではない。むしろ神と対立するものである。そして三つ目に「悪霊に属するものです」とまで言われています。私たちがへりくだらず、苦いねたみや敵対心によって誇っているなら、それは悪霊から力を得て活動しているものに過ぎないということです。

そういう知恵がもたらす悪い結果が16節です。ねたみや敵対心のあるところに生じる第一のことは「秩序の乱れ」です。互いに争い、非難し合うところでは、確かに秩序の乱れ、混乱でしょう。また「あらゆる邪悪な行いがある」とも言われています。具体的にはどんなことかは示されていませんが、それは意図的かもしれません。まさにあらゆる種類の悪が生じるのです。地に属し、肉に属し、悪霊に属する知恵は、このような結果をもたらし、そこにある共同体をかき回し、メチャクチャにするのです。

これに対して本物の知恵は、どのような特性を持つでしょうか。そのことが17節に記されています。上からの知恵にはどんな特徴があるのか。まず第一にそれは「純真であり」とあります。これは汚れがないこと、ピュアなことです。これは何よりも神ご自身のご性質です。神には汚れもしみもありません。暗いところが少しもありません。そういう性質を上からの知恵は映し出します。次に「平和、寛容、温順」とあります。神は平和の神です。ご自身と敵対関係にあった私たちに神との平和をもたらしてくださいました。この平和の祝福を神はなお世界の上にもたらそうとしています。次の寛容も平和と結びついているでしょう。これは他の人に対して厳し過ぎないこと。怒るに遅いこと、性急に反応せず、相手を思いやって行動することです。三つ目の「温順」も平和と関係があり、他者に順応すること、道徳的な原則に反しない限り相手に進んで道を譲ること、相手に従うことです。

次に「あわれみと良い実に満ち」とあります。「あわれみ」についてはこの手紙の2章で見て来ました。主を信じる信仰を持つ者たちはあわれみにその信仰を現す者でなければならない。神からの知恵を頂いている者も然りです。あわれみの心に満ち、またその具体的な行動の現れとしての良い実に満ちているという特性を示す。

そして最後に「えこひいきがなく、見せかけのないものです」とあります。えこひいきについてもすでに2章で見て来ました。神からの知恵によって行動する人は人を偏って見ることをせず、党派心によって行動せず、物事を正しく、公正に判断します。またこのような知恵を持つ人は信頼できる人であって、見せかけだけの人ではありません。信頼に足る中身を持っています。

ヤコブはこうして今日の箇所の結論的な言葉を18節で語ります。「義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。」 「義の実を結ばせる種」とは何でしょうか。「義の実」とは「義という実」という意味だと思われます。そしてここ「義」とは神が良しとされること、神が喜ばれる正しいことという意味だと思われます。なお原文に「種」という言葉はありません。この後に「蒔く」という動詞が出て来るため、それに合わせて「種」という言葉を新改訳は加えたと考えられます。ではこの神が喜ばれる義の実はどうしたら結ばれるのでしょうか。そのために必要な二つの大切な条件がここに語られています。一つは「平和のうちに」ということです。これは平和という土壌、風土、気候が必要だということでしょう。平和という環境がそこになければ、神に喜ばれる義の実は結ばれないのです。これと対照的な言葉は前に見た1章20節です。「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」 怒りが支配しているような環境では、いくらそこで正しいことが語られても、御心にかなう義が実現されることはない。怒って、争って、何かを述べても、神が良しとされる実が生み出されて来ることはない。むしろ後味の悪いものだけが残ります。ヤコブはそのためには「平和」という環境あるいは雰囲気が必要だと言うのです。神の義の実を結ぶ者になろうと思うなら「平和のうちに」というこの要素を大切なものとして考えて行かなければならないのです。

もう一つの条件は、「平和をつくる人によって」ということです。「平和」「平和」と繰り返されて、少しくどいようにも思えますが、これは「平和」というこのテーマを強調するための意図的なくどさでしょう。ここに義の実は「平和」という環境でこそ結ばれると同時に、そのために労する人自身が「平和をつくる人」でなければならないと言われています。すなわち自ら積極的に平和を求め、このために自分自身をささげている人です。何か争いや問題があると喜んで出て行って、一方にくみし、そこにある対立を

あおったり、さらにかき回すような人であってはならない。真の知恵を頂いている人は平和をつくり出すために日々心を用い、献身している人です。難しい状況の中で、平和という環境を大切に考え、平和をつくり出すためにその知恵を用いている人です。そのような人こそ、神に喜ばれる義の実を結ぶという働きをすることができるのです。

果たしてこのヤコブの言葉の前で、私たちはどうでしょうか。ついつい自分を持ち上げ、自己主張し、意見が違う人と張り合い、対立し、党派を組み、相手を打ち負かし、混乱を引き起こしても、自分は真理に熱心で、正しいことをしていると自己正当化しがちな私たち。しかしヤコブによれば、そのような知恵は地に属し、肉に属し、悪霊に属するものであるかもしれない。私たちは自分自身を振り返りたいと思います。真の知恵は上から来る知恵であって、これを頂いている人は、その知恵にふさわしい柔和さを持っている人です。謙遜さを持っている人です。へりくだった心を持っている人です。その人は妬みや敵対心に駆られて行動する人ではなく、平和を求める人です。重大な事柄でなければ喜んで人に譲ることができる人。またあわれみの心に満ちている人、えこひいきのない人。そういう人であってこそ、神に喜ばれる義の状態を作り出すために、その知恵を発揮し、また用いられる人です。このヤコブの言葉に照らして自分は知恵ある者なのかどうか、真の意味で賢い人なのかどうか、反省させられたいと思います。そしてこの基準に合っていないことを思うなら、悔い改めをもって、神からくる知恵また賢さを求めたいと思います。神との交わりを通して上からの知恵をこの身に頂く者となりますように。色々と難しいことが多いこの世、争いと混乱に満ちているこの世の中で、知恵のある賢い人として行動することができるように。そして神に喜ばれる状態を作り出すために、その道具となって神に用いて頂ける光栄と特権に歩んで行きたいと思いません。